

将来にわたって学び続ける生徒の育成を目指した授業づくり ～一人一人の生徒の3Sの実現に向けて～

提案者 福元 康弘 塩屋 千鶴

1 学部研究主題設定について（紀要pp. 81－84）

前次研究では、授業で目指したい生徒の姿として、Style, Self, Socialの三つの姿（＝3S）を明らかにした。Styleとは学びの主体として生活する姿、Selfとは他者との関係の中で自分らしく生活する姿、Socialとは社会の一員として生活する姿である。

わたしたちは、生徒一人一人の3Sを実現する授業づくりを進めることが、将来にわたって学び続け、生活を自ら豊かにする生徒の育成につながると考えた。そこで、将来にわたって学び続ける生徒の育成を目指した授業づくりの在り方を探ることを本研究の目的とし、実践することにした。

2 研究内容与方法（紀要p. 85）

(1) 研究内容

〈研究内容1〉

習得と活用の観点から授業を立案するための考え方を明らかにする。

〈研究内容2〉

3Sの実現につながる活動表を作成し、習得と活用の観点を踏まえて設定した学習活動に、生徒が主体的に参加するための手だてを工夫する。

〈研究内容3〉

授業において有効だった手だてを用いて、活用場面（他の授業場面、家庭や現場実習先など）における実践を行う。

(2) 研究方法

ア 対象： 本校高等部生徒24人。3人の生徒を事例対象生徒とする。

イ 対象授業： 国語科，作業学習を中心に行う。

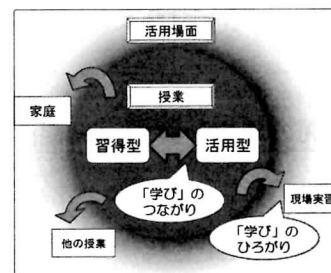
ウ 活用場面： 「朝の会」「帰りの会」で実践する。学校以外の活用場面として、家庭、現場実習先において実践する。

エ 検証方法： 「学びの印象度チェックリスト」，エピソード記録，家庭や現場実習先への聞き取りやアンケートを用いて，本研究で取り組む授業づくりの有効性を検証する。

3 研究の実際

(1) 研究内容1（紀要pp. 86－87）

指導計画や一単位時間の授業を立案する際に、生徒が新しい知識や技能を身に付け、それを実際の生活に生かすことができるようになるため、基礎的・基本的な知識・技能の習得を目指した習得型の学習活動と、課題を解決するために必要な力の育成を目指した活用型の学習活動をセットにして構成した。（「学び」のつながり）さらに、授業を立案する段階で、身に付けた力を発揮するための活用場面（他の授業、家庭、現場実習先など）を設定した。（「学び」のひろがり）



習得と活用の観点から立案した授業

(2) 研究内容2（紀要pp. 87－90）

これまでの授業実践、現場実習先や卒業生からのアンケート，全体研究，文献から，3Sの実現につながるための学習活動を，3S活動表として整理した。研究内容1を踏まえて，将来にわたって学び続ける生徒の育成を目指した授業づくりの手順を，単元や題材の授業づくりサイクル（PDCA），一単位時間の授業実践サイクル（pdca）として整理した。

(3) 研究内容3（紀要p91）

生徒の「学び」をひろげるためには、学校で有効だった支援ツールを家庭や現場実習先などの学校以外の場面でも使用することが有効である。（本校研究紀要第16集）本研究においては、支援ツールを学校以外の場面で使用する際は、事前に聞き取りや訪問などで相手方の実態を十分に把握しておき、その実態に合わせて支援ツールを作成・使用した。

授業づくりの実際 (紀要pp. 92-107)

実践した授業における取組の一部を下表に示した。

	国語	作業学習 (窯業班)	作業学習 (木工班)
授業づくり	習得と活用の観点からの立案 (研究内容 1)		
	①習得：疑問詞の意味や答え方を知り、標語にする。 ②活用：疑問詞を使った、クイズゲーム、模擬面接を行う。 ③習得：新しい疑問詞の意味や答え方を知り、標語にする。 ④活用：教室や校長室で模擬面接を行う。	①習得：教師と一緒にメモする内容と方法を知る。 ②活用：自分から確認し、一人でメモをする。 ③習得：メモの活用方法を知り、設定した場面で活用する。 ④活用：新しい作業内容を設定し、メモを一人で活用する。	①習得：作業に必要な道具を知る。 ②活用：足りない道具が分かり、教師の指示で準備をする。 ③習得：道具が足りないときに伝える相手や伝え方を知る。 ④活用：必要な物や用件を分かりやすく相手に伝える。
	3 S 活動表を踏まえた学習活動 (研究内容 2)		
	Self：面接評価シートを作成し、それに記入することで友達同士で評価し合う。	Social：個に応じて反省ノートやメモを取り入れ、そのツールを活用して評価を行う。	Style：チェック表を使って、準備や片付けを行う。 Self：支援依頼をしたり、アドバイスをしたりする。
	「学び」の三要素を踏まえた手だての改善 (研究内容 2)		
対象生徒の様子	・これまでの学習を視覚的に振り返ることができるようにするため、ファイルを作成した。	・作業のポイントと関連付けて目標を設定したり、振り返ったりすることができるようにメモを作成した。	・足りない物を伝えたり、支援依頼をしたりするための絵カードを作成した。
	Aさん	Bさん	Cさん
	授業改善後の様子		
	・教師の発問に対して自分から手を上げて発言したり、友達に「こうするんですよ。」とアドバイスをしたりする姿が見られるようになった。	・大事なことは自分からメモをする、教師に自分から聞きに行くなどの、考えながら作業に取り組む姿が多く見られるようになった。	・自分から写真カードを使って教師にサンドペーパーを要求することができるようになり、精度の高い製品を作ることができるようになった。
	活用場面での様子 (研究内容 3)		
対象生徒の様子	【四者面談】 ・授業で使ったファイルを持って行くようにしたことで、授業と同様に質問に対して適切に返答したり、姿勢を正して座って話を聞いたりすることができた。	【朝の会】 ・一日のスケジュールを教師に尋ねながら自分で作成できた。 【現場実習先】 ・一日の日程や作業のポイントを支援員に尋ねてメモすることができた。	【帰りの会】 ・絵カードで自分の気持ちを友達に伝えることができた。 【現場実習先】 ・支援員に楽しかったことを絵カードで伝えることができた。

4 まとめと今後の課題 (紀要pp. 108-110)

【成果】

- ・課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等をはぐくむためには、活用型の学習活動を意図的に設定することが重要であった。授業で身に付けたことを活用する他の場面を意図的に設定することは、生徒の「なぜこれを学ぶのか」という学ぶ意味の認識や学ぶ意欲につながった。
- ・前次研究の課題であった、生徒一人一人の3 Sを実現するために日々の授業でどのような学習活動を設定すべきかということについて、これまでの実践や文献などから3 S活動表として整理することができた。
- ・一人一人の生徒の実態に応じて「学び」の三要素を踏まえて手だてを講じた結果、授業に主体的に参加し活動する姿や、設定した個人目標を達成する姿が多く見られるようになった。
- ・家庭や現場実習先と連携した実践では、それぞれの実態に合わせた支援ツールを作成しそれを学校で使用することや、支援ツールを十分に使いこなす力を育成した後に家庭や現場実習先で使用する事の重要性を明らかにすることができた。

【課題】

- ・生徒同士のやり取りや学び合いにおける有効な手だて等の検討を更に深める必要がある。
- ・様々な教科等において3 S活動表を用いた実践を行い、各教科等や自立活動と3 S活動表の関連を明らかにする必要がある。
- ・卒業後の生活を見据えながら、過不足ない支援や、支援者の負担が少なく実行できる支援の在り方について検討を深める必要がある。